

流域情報

# あらかわ



発行●NPO法人荒川流域ネットワーク編集委員会／編集人●鈴木勝行  
住所●358-0046 埼玉県入間市南峯400-4 FAX04-2936-4120  
ホームページ●<http://arariver.org/>



新緑の名栗川 (飯能市下名栗)

写真提供・木崎芳雄氏(入間市写真連盟事務局長)

## CONTENTS

- ① 事例に見る荒川の自然再生の方向性へのヒント
- ② Network Information  
荒川流域一斉水質調査を実施「ミスガキ復活キャンペーン」
- ③ 第1回「みずかけ”サ”論」を開催  
荒川流域水環境シンポジウム  
自然再生通信  
東久留米市「しんやま親水広場」事業
- ④ 森づくりの現場から Vol.4  
多摩川源流での「百年の森づくり」(前編)
- ⑤ ちょっと気になるトンボ Vol.1  
ナゴヤサナエ
- ⑥ いきものの道・魚の道  
荒川の魚、特にアユについての「試験研究成果からの提言」(前編)
- ⑦ あらかわ写真館  
大正時代の入間川・新河岸川
- ⑧ 流域活動団体のイベント・カレンダー  
2007年5～7月

あらかわの歴史探訪、流域環境に取り組む若者たち、ミスガキ紹介、エコプライド通信は休載。

## 事例に見る荒川の自然再生の方向性へのヒント

荒川流域ネットワーク理事・工学博士(八戸工業大学) 木内 勝司

河川の自然再生を考えるとすることは、人間の生活基盤という枠組みを前提として、河川の持続的な自然システムを維持していこうということである。すなわち、水位・水量の変化、土砂の浸食、運搬、堆積により形成される河道の物理的環境とこれを基盤として成立している生物的環境を維持していくことを考えることに他ならない。

わが国の多くの河川で河床低下が問題となっており、荒川においても例外ではない。その原因として砂利採取、

河川改修、ダムなどが上げられているが、流域の土地利用を含めた総合的な分析が必要であり、大局的な観点から河川地形学を河川再生に応用する努力が必要と指摘されている。

荒川ではこの河床低下により、高水敷と普段水が流れる低水路の水面との高低差が10m近くに及んでいるところもあり、高水敷の乾燥化、樹林化が進行している。こうした河床低下が進行した状況で河川の自然再生を目指すにはどういったことが考えられるか。青



建設コンサルタントとして全国各地の河川の環境整備、自然再生に取り組むほか、環境アドバイザー、環境まちづくり等の市民活動に従事。技術士(建設部門)、工学博士(八戸工業大学)。入間市環境審議会委員、NPO自然環境復元協会理事、NPO荒川流域ネットワーク理事。

森県岩木川での実施事例を紹介する。

岩木川では、自然観察・学習の要請に応え、自然環境の保全と利活用を図るため、単調化した高水敷に浅水面を掘削して湿地ビオトープの創出を図るなど、広範囲な高水敷を対象に自然再生のための整備が行われた。浅水面掘削の位置、掘削深の検討に際して、河道形状の安定性のチェック、融雪期、洪水時及び平常時の流水の状況の解析、

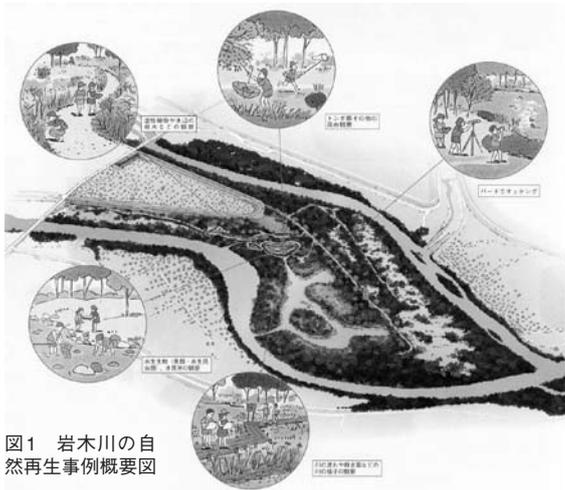


図1 岩木川の自然再生事例概要図

植生・生物相と水位変動との関係についての調査・検討が行われた。また、環境の保全と人の利用の両立のために、植生、河畔林、魚類・鳥類・昆虫類等の生物相の現地調査結果から対象地の多様性評価が行われ、計画地は自然保全エリア（自然の推移に任せる）、ビオトープエリア（浅水面を掘削）、自然とのふれあいエリア（観察施設を配置）の3つの区域に区分された。

自然保全エリアとビオトープエリアは、原則立入制限とし、人の利用と自然の保護の両立を目指した。これらの検討結果は事業実施のための基本計画に反映され、ビオトープ造成工事及び利用施設の工事の終了後、「みずべの学習ひろば」として地域に開放された。地元小学校の児童生徒等による自然学習

イベントも実施されている。単調化した高水敷に浅水面を掘削造成して、融雪洪水等の水位変動や流況に応じて湿地ビオトープや水辺の自然を回復させる手法は、河川の自然再生にとって有効な手段であることが実証されている。

河川は千差万別であり、先進事例で成功したことが必ずしも他の河川でうまくいくとは限らないので、それぞれの河川特性を見極めた上で、その川の特性に見合った適切な自然再生の方法を見出していく必要がある。しかしながら、河川の自然再生を考えるに際してのアプローチには共通するものがある。

河川改修が進んだ河川で見られる河床低下という現象に対してどのように自然再生を図るか、一言でいえば、その基本は河川空間を本来の氾濫源として洪水攪乱を受けて多様に変化する空間に戻していくことが重要であるといえよう。すなわち、水際となる河岸部分、高水敷と低水路の間にエコトーンが維持されること、高水敷は氾濫源としての湿地環境が維持されるように冠水頻度を高めることがポイントである。

荒川の自然再生についての方向性のヒントは、事例から次のように読み取

れるのではないだろうか。

①河床低下が進んだ低水路と高水敷の高低差をできる限り縮め、高水敷を本来の氾濫源として再生していく。

②低水路空間を広げ、洪水攪乱によって河床や水際・河岸の多様化を図る。

これらの具体化を図る方法は、場所ごとに異なると考えられる荒川の特性を綿密に調査・解析して検討し、長期的対応、中・短期的対応など段階整備をふまえて進めていくことが望ましいと考えられる。

河道の自然再生への取り組みはまだ始まったばかりであり、その技術は未熟である。自然生態系は複雑であり、河道の様々な現象と生態系のかかわりは十分解明されていない。実際の河道整備において順応的管理により様々な試行錯誤の上にその効果を確認しながら整備を進め、必要に応じて計画のフィードバックをしていくことが必要である。



図2 整備4年後の岩木川の自然再生状況

\*木内氏の岩木川での自然再生の取り組みについての詳細については、別に作成の冊子に掲載予定。

## NetWork Information 1

### 6月3日に流域一斉水質調査を実施。今年も、硝酸態窒素の調査も追加

#### 試薬配布

日時●2007年5月27日(日)  
13:00～16:00

場所●日高市生涯学習センター

調査日時●2007年6月3日(日)  
9:00～

毎年6月の第一日曜日に行ってきた荒川流域での一斉水質調査を3日に実

施する。今年は今までのパックテストの試薬に加え、硝酸態窒素の試薬を追加して、河川における全窒素量を調査することになった。また、昨年と同様に全国水環境マップ実行委員会主催の「身近な水環境の全国一斉調査」によるCODのみの調査も行われる。EC(導

電率)の調査は取りまとめが困難なため当面見送ることとなった。

調査に先駆けて、5月27日に一斉水質調査用の試薬配布と硝酸態窒素の検査方法や全窒素の算出方法等についての説明会を行う。調査の説明の後、参加団体同士の情報交換も開催する予定。

水質調査に参加を希望される団体又は個人の方は、荒川流域ネットワークの事務局まで。

## NetWork Information 2

### 「ミズガキ復活キャンペーン」として巾着田の清掃を実施。投網の実習も

日時●2007年7月22日(日)  
10:00～14:00

集合場所●日高市高麗公民館  
実施場所●高麗川巾着田

毎年、子どもたちに綺麗な川で遊んで貰おうと高麗川の巾着田をフィールドに行ってきた「ミズガキ復活キャンペーン」。昨年は降雨のため行えな

ったゴミ掃除を実施する。

ゴミ清掃が終わった後は、昨年に引き続き、投網の実習講座を開催。運がよければ、投網に掛かったアユの姿を見ることが出来るかも知れない。

イベントの詳細については、鈴木(090-7804-5722)・大熊(04-2989-5659)まで。

**NetWork Information**  
**3**

**入間川の堰の現地見学と魚が移動できる川を目指す「みずかけ“サ”論」を開催**

《堰の調査》

日時●2007年6月24日(日)

9:00~15:00

集合場所●川越市菅間公民館(予定)

《第1回みずかけ“サ”論》

日時●2007年7月8日(日)

13:30~16:00

会場●鶴ヶ島市富士見公民館(予定)

昨年に引き続き、荒川流域ネットワーク主催で、「みずかけ“サ”論」を開催。今年の第1回のテーマは、「アユは入間川・越辺川を上れるか」である。魚の移動という視点から堰などの現地見学を行い、その体験や、関係機関の情報をもとに、これからの荒川水系の自然

復元を語り合う“サ”論を開催する。

現地見学は、バスでの移動が困難なため、車に分乗して移動しながら、菅間の堰など4~5箇所の堰を対象に行う。講師には、魚道について詳しい君塚芳輝氏を予定。荒川支流の自然復元に向けて実りのある話し合いの場になることを目指している。

問い合わせは、荒川流域ネットワーク事務局か090-7804-5722(鈴木)まで。

**NetWork Information**  
**4**

**第8回荒川流域水環境シンポジウムを熊谷の立正大学をメイン会場に開催**

日時●2007年7月28日(土)・29日(日)

会場●立正大学熊谷キャンパス

宿泊●森林公園の資料館

視察先●太郎右衛門自然再生事業地と三つ又沼ビオトープ、玉淀ダムと川の博物館など

昨年8月「森・里・川・海をつなぐ環境再生—魚が行きかう川づく作り」をテーマに秩父市大滝において開催された荒川流域水環境シンポジウム。第8回の今年は、立正大学熊谷キャンパスをメイン会場として開催。

中流域で開催する今回のシンポジウ

ムでは、①流域のゴミ問題②魚と川漁の問題③源流の森と流域経営といった少なくとも3つの分科会に分かれて、詰めた議論を行い、それぞれについて県や国などの関係機関に対して要望し、広く提言を出していくことを目指す。

①については、荒川中流域の広い高水敷には不法投棄されたゴミや埋められた産業廃棄物などがあり、それらの情報を集めマップ化を目指している。

②については「魚の行きか交う川づくり」を実現するため、昔の魚や漁に

関する聞き取り調査なども行なって情報を集め、これも「流域魚マップ」にまとめることを目指している。

③については、源流の森林や山村の活性化について流域全体の問題として解決することを目指す。

シンポジウム終了後は、森林公園の資料館で宿泊し、夜の交流会を行う。

翌29日(日)は、2つのコースに別れてバスで移動しながら、荒川中流域の各ポイントを視察・見学する予定。

問い合わせは、荒川流域水環境シンポジウム実行委員会事務局まで。

TEL 03-3654-7240

Email sato@cleanaid.jp 佐藤 正兵

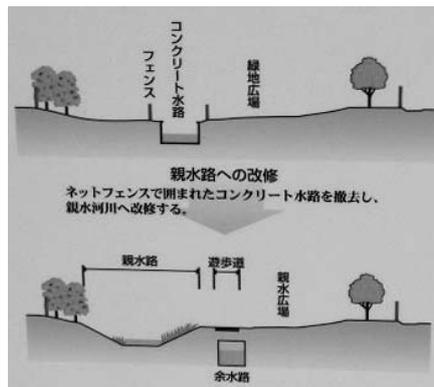
**自然再生通信**

**東久留米市下水道課による「しんやま親水広場」事業  
東久留米市の団地の中に突如出現した  
野草に覆われ、蛇行した雨水下水路**

東久留米市が雨水下水道事業に伴い進めていた「しんやま親水広場」が昨年3月に完成し、周辺の市民の憩いの場になっている。場所は市内にある公団西団地の敷地内の緑地。以前は2面コンクリートの狭い水路があったが、下水道事業だが古い水路を撤去した後、緩やかに蛇行する約640mの小川「親水路」を造りだした。

川沿いに遊歩道が付けられ、その下には「余水路」という高さ2m、幅2mのコンクリート水路を埋設し、親水路の水位が40cmを越えると「余水路」に水が流れるようになっている。

施工したのは市の環境部下水道課で、東京都で新しく多自然の河川を作る事業が行われることは最近では決して珍しくないが、雨水下水道事業として行



しんやま親水広場の断面図

うのは珍しい。

東久留米市は市民も含めた親水化検討委員会を作り、56年協議を続け、計画ができたという。川の両側の土地は公社から借りている。1年の3分の1は水が涸れる川だったので、現在は他の川から水を引いてきて流している。



改修前の水路の様子



改修後の水路。家族連れの人たちが訪れていた

遊歩道は市民の散歩道になり、夏場は川の中で遊んでいる親子連れの姿もあった。身近に自然の小川を復元しようという東久留米市の人たちの熱い思いが伝わってくる。(鈴木勝行)

# 森と人の暮らしを繋ぎ、崩壊の危機が迫る 森林を再生することを目指し、小菅村に入った

2007年1月に嵐山町の国立女性教育会館で行われた第4回みずかけ“サ”論における東京電力(株)の矢野康明さんの多摩川源流での「百年の森づくり」についての講義を2回に分けて掲載する。

## 1.なぜ源流の森に

東京電力としては、地球温暖化やヒートアイランドの問題に対して、エコサポートプランというプランを2004年から動かしている。私たちの狙いとしては、暮らしと森を繋ぐことにある。

二酸化炭素の増加といってもなかなか身体で感じない。暮らしの中では、家庭や中小のオフィスの方々和省エネに取り組みながら、一方で吸収源である森の再生に資金を投入していくというのがプランの内容である。賛同してくれるお客様が増えれば増えるだけ、東京電力が資金投入しながら、温暖化対策を進めていこうということである。

このプランの中でモデルプロジェクトとして、森林再生の取り組みを始めたのが、多摩川の源流である。その源流は山梨県に入っているが、私たちは、そこで行われている多摩川源流自然再生協議会に参画した。

協議会の会長は東京農業大学の宮林茂幸先生、事務局が中村文明さんの多摩川源流研究所で、地元自治体・山梨県森林組合・国交省・環境省・林野庁などの機関とNPOの人たちで構成され、そこに東京電力も参画をしている。産・官・学・民の協議会である。この中には、源流景観再生部会・森林再生部会・源流文化再生部会という3つの部会がある。小菅村の会議室でケンケンガクガクの議論を続けてきた。



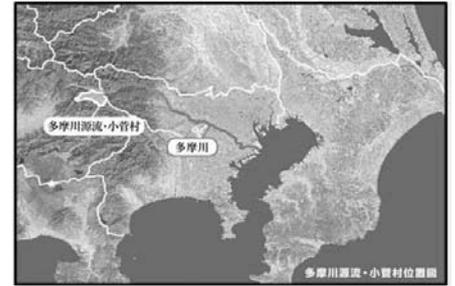
現在の小菅村の水源林の様子

## 2.多摩川源流の森の変遷と実態

何人もの人が手を繋いで抱えても、抱えきれないように大木が、この源流域にもある。江戸時代、江戸幕府を支えるために多摩川上水を引いたが、その上流域は「お止め山」として森林の伐採を禁止した。世界的にも有名な施策である。鷹匠のための鷹巣山などがあり、鷹を守りながら暮らしていた。

地元の人の話では、お殿様を使う長い箸をミズキから作ることを命じられ、籠に乗せて献上したそうだ。山の暮らしも維持させながら、山と流域の水を守るという政策である。

明治時代になると、薪や炭を得るために、木が切り払われるという事態が



ている。

以前、小菅の山は、ほとんどが薪炭林に使われていた広葉樹で覆われ、茅場もあった。小菅村の人は、それらの資源を使い、江戸にも大量の炭を供給しながら暮らしをしていた。

第2次世界大戦の時に大量の燃料が必要になり、主に炭の供給義務量が割り当てられ、昭和20～30年代小菅の山の木もほとんど切り尽くされた。

次に起こったのが燃料革命で、薪・炭の暮らしに電気が入ってきて、約50年前には、プロパンガスや灯油など便



## 森づくりの現場から

Vol 4

# 多摩川源流での「百年の森づくり」《前編》

講演▶矢野康明氏

<東京電力(株)環境部グリーンサポートグループ マネージャー>

起こってしまう。原生林も含めて大量の木が切られてしまった。明治34年東京市が山梨県側も含めて御領林を払い下げを受け、水源林経営が始まった。尾崎行雄市長になってから本格的に森林経営が始まった。

小菅村は奥多摩湖の上流部にあたるが、水源林は全面積の約3割ほどである。それは、東京都に引き継がれて、100年を経て緑豊かな森林が維持され



昭和20～30年に木が切り尽くされた小菅の山

利な化石燃料が入ってきた。薪・炭にする広葉樹が必要なくなり、そこで植えられたのが針葉樹。現在の小菅の森林は、スギ・ヒノキなどの針葉樹が広がっている。全国的にも一斉造林として植えられた。

今、多摩川源流の森は、概観すると豊かな緑に覆われている。地域再生協議会では、東京農大の菅原研究室が胸高直径は勿論、土壌あるいは林間の距離・高さなど、厳密な森林資源調査を夏の間1ヶ月をかけて行った。その面積は、全民有林4500haのうちの350haという莫大なものだった。

小菅でも一部には下草がしっかり生えて、しっかりと管理された人工林も育っているが、殆どが下草も殆ど生えず、表層の土壌が徐々に洗い流されて

状態である。枝打ちも十分にされていないスギ・ヒノキ林が多い。

昭和30年以降、建設ラッシュで木材需要がどんどん増えた。その中で、国内材は戦後直後植えたので、まだ育っていない。国産の木は切って使っていないが、間に合わない。そこで便利な輸入材が代わりをしてくれた。

自給率は、94.5%だったものが急激に下がって、現在では約20%と報告されている。戦後復興期から40～50年



暴風のため倒伏した民家の裏山のスギ（岡山県東粟倉村）

経っているにもかかわらず、競争力で負けて国産材が使われていない。これは、小菅でも同じような状況である。

針葉樹の森を間伐を行わず、放置したため、大きな台風が来た時に細い木々が、一斉に倒木を起こし、裏山の土砂が崩壊してしまうという現象が各地で起こっている。

小菅村の山についてはどうかと菅原先生に聞いたところ、「このまま5～10年放置すると、手遅れになる可能性がある」という話だった。

その理由は、「5～10年の間に木は光を求めて高くなるが、太くはならない。直径に対して高さの比（形状比）がどんどん悪くなる。そういう状態の時に間伐をすると風が通ったり、雪の時に力が加わったりすると、倒れてしまう。健全な形状比の内に手を入れないと非常に大変なことになる。」ということだった。

### 3. 森と暮らしを繋ぐ

日本の総人口はいよいよ減少の時代に入ってきたが、世帯数はどんどん増えている。それと比例してエネルギーの消費量も増え続けている。そのため、地中に溜まっていた二酸化炭素や熱が地上に放出され、地球の温暖化が問題になってきた。他方、日本の森は放置されて、荒廃の危機の中で、二酸化炭素の吸収能力も低下している。

私たちが始めたエコサポートプランは、繋がりを失った森と人の暮らしを繋げることで、持続可能性のある社会を目指し、資源の循環型利用とエネルギー消費量の削減、熱の吸収といったことを実現するために、森林の保全とその資源の利用に取り組むものである。

次に多摩川源流で取り組んでいるプロジェクトを簡単にご紹介したい。

（以下次号）

## 下流部の深い場所を好む変わり者。荒川では実態が分からないままに絶滅の心配も

今回から荒川で見かける、ちょっと気になるトンボを数回に渡って紹介しよう。トップバッターとして登場頂くのは、ナゴヤサナエである。名古屋で最初に発見されたことからその名がある、日本特産種である。

信濃川や木曾川といった大河を好み、埼玉県からは荒川と利根川の他に、東松山付近の都幾川や市ノ川からも記録されている。全国的に分布はかなり局限されている珍しいトンボで、本県レッドデータブックでは、準絶滅危惧種に指定されている。

さて、このトンボの気になる点は、ヤゴの習性である。一般に流水に生息するヤゴは、上中流域の浅い場所に生息するのだが、本種は下流部のかなり深い場所を好む変わり者である。木曾川ではアクアリングを付けて水中に潜り、水深1m以上の泥深い川底から、カレイやハゼの稚魚と一緒に採集したという話だ。このヤゴをゲットするのは命がけである。そんな無謀なことをしない私は、今だに本種のヤゴを採ることがない。

しかし、抜け殻は比較的容易に見つ

かり、とくに海水が混じるような河口部でよく見つかる。汽水湖である涸沼や宍道湖では、足の踏み場もないほどの抜け殻が見つかることがあるそうだ。ところが不思議なことに、湖の付近では成熟した成虫は全く見かけないという。一方、信濃川では新潟港付近でも羽化し、羽化した成虫は、一気に上流を目指して飛び去ることが観察されている。これらのことから、本種は川の



NPO法人むさし野里山研究所代表 新井 裕

上流で産卵し、孵化したヤゴが流下して河口部で羽化、羽化した成虫は上流へ遡上すると考えられている。

それでは、荒川の場合にはどの辺りで産卵し、どこまで下って羽化するのでしょうか。とても気になるところだが、よく分からないのだ。私は北本付近で成熟成虫や産卵を見たことがあるが、熊谷付近では全く見かけない。一



ナゴヤサナエのヤゴ  
東京都建設局河川部のホームページから

方、抜け殻は北本市から板橋区までの範囲で見つかっている。もっと下流でも羽化している可能性が大きいのだが、確かめられていない。河口部では満潮時の増水や、船の往来による波で岸辺に付着している抜け殻がすぐに流されてしまうため、確認が困難なのである。また、下流はゴルフ場などによって、岸辺に近寄れない場所も多い。さらに、羽化期や成熟成虫の活動期は真夏であり、暑い時期に日陰のない河原で調査するのは、かなりつらいものがある。

このように、気になるトンボでありながら、調査が進んでいないのが実情である。以前は北本付近では比較的個体数が多かったというが、最近は何も分からないまま、荒川から絶滅してしまうのかも知れない。

荒川の魚、特にアユについての『試験研究成果からの提言』●前編

■講演 金澤光 <埼玉県環境科学国際センター自然環境主任研究員>

# アユは、50年前まで流域の各村落で行われた川の行事の主役だった

2006年に行われた第3回の「みずかけ“サ”論」で講演された金澤氏の荒川における魚類の生態についての詳細な研究内容を2回分けて連載する。永年荒川を見てきた専門家の「生きた」魚たちの情報である。

## 荒川に生息する魚は、19科53種

「魚の目から見た」というタイトルですが、魚にはなりきれないので、『いままでの試験研究成果からの提言』という形でお話をしたい。

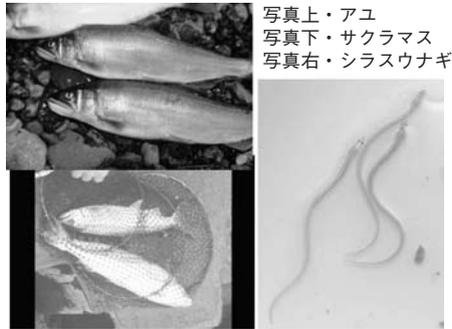
埼玉県内に生息する魚類の数は21科66種、荒川にはその内、19科53種が生息している。玉淀ダムから上流の上流域に8科17種、玉淀ダムから吹上の大芦橋あたりの中流域に11科31種、大芦橋から秋が瀬の取水堰までの下流域に9科29種、秋が瀬の堰から河口までの感潮域に17科41種が生息している。感潮域にとくに多くの種類が生息していることが分かる。

海と川を行き来している3種類の魚たちがいる。一番目は降河回遊魚で、ウナギのように海で生まれたのち、淡水域に入ってそこで育ち、産卵のために海に下る魚。荒川では、ウナギは黒くなる前のシラスの状態が秋が瀬の堰の下まで来ている。

二番目は遡河回遊魚で、淡水で生まれて海で育ったのち、産卵のために再び淡水にもどるサケ・マスといった魚



基調講義を行う金澤氏



写真上・アユ  
写真下・サクラマス  
写真右・シラスウナギ

たち。大昔は荒川にもサクラマスがいたと思われるが、現在でも外洋に出ないで、河口付近で2~3年過ごしていると考えられる、やや小型のサクラマスが秋が瀬の堰の下で捕獲されている。

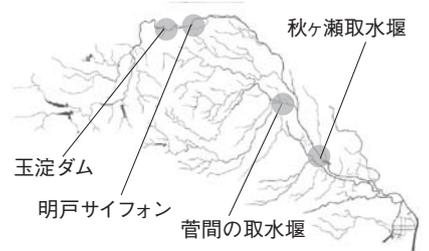


三番目は両側回遊魚で、淡水で生まれてすぐに海に下り、産卵とは無関係に、再び淡水にもどるアユや淡水産ハゼ類である。今回はその中でとくにアユについてお話をしたい。

## 復活してきたアユの最初の障害は秋が瀬の取水堰

東京湾から上がってくる天然アユの全盛期は1955年頃までではないか。その後は、高度成長期の水質汚濁の影響で、遡上数は大幅に減った。

秩父市にある赤平川の支川小森川では、1955年以前にアユ漁が行われていたという記録があり、明治42年には、嵐山町の菅谷村で50貫(187.5kg/1尾大きき15cm30gとして約6000尾)のアユ



が捕れたという記録が残っていて、当時のタンパク源としては貴重なものであった。捕ったアユは河原で酒を飲み交わしながら皆で食べていた。川に親しむ村落の行事的なものであった。

1975年頃から秋が瀬の下流のBODの数値が下がるとともにアユが釣れ始めた。1970年代の荒川の下流では、BODが高く推移していたが、下水処理施設ができたため徐々に数値が下がってきて、それとともにアユの遡上が確認されるようになった。1981年には、秋ヶ瀬取水堰の魚道で稚アユ遡上を確認した。

1986年から5カ年間、秋ヶ瀬取水堰の下に集まってきているアユの遡上量と魚道調査を行った。最も多く遡上したのは1990年で、4月上旬に2万尾、下旬7万尾、5月中旬2万尾、6月上旬2万尾の遡上を確認した。

秋が瀬の堰は、魚道とは反対の右岸側に越流部があるため、アユが右岸側に滞留しやすい。以前から秋が瀬の魚道は欠陥魚道だといわれていたが、構造上の問題よりも呼び水効果を生かすような管理・運営が必要ではないかと考え、越流部の変更の提案も行った。

## 放流調査によって分かった荒川のアユの遡上の実態

荒川のアユはどこから来たのか、利根川を上ったアユが武蔵水路を下って荒川に来るのではないかとという疑問が以前からあり、荒川の数カ所で稚アユの放流して、どこまでアユが上るか調査を行った。

1990年羽根倉橋下で標識アユ4000尾を放流し、熊谷市先まで遡上したことを確認した。1991年熊谷市荒川大橋で標識アユ4000尾を放流し、その分散状況を調べてたが、上流に21.5km、下流に8.4kmまで移動していることが



荒川の各支流でも地域の川の行事としてアユ捕りが行われていた



分かった。

荒川は、友釣りが主流なので、天然アユが友釣り用のアユとして使えるかどうかについても調べてみた。現在、放流されているアユには、人工産・海産・琵琶湖産・ダム湖産など様々な系統がある。2000年から2002年まで、海から戻ってきたアユを寄居町の荒川で放流して、その成育の状態を調査した。

2000年5月11日、2001年4月10日、2002年3月28日に各3000尾を標識を付けて放流した。放流したアユは2000年には7尾、2001年には47尾、2002年には150尾が釣獲された。上流にある玉淀ダムで全てのアユの遡上が止まってしまうため、釣獲されたのは、放流した正喜橋より上流部の方が多かった。

大きさについても調べたが、大きいもので、6月には60g、8月には100g以上のものが釣獲され、友釣り用のアユとしては、他の地域アユに比べて遜色無いことが分かった。

実際に寄居の荒川では、毎年放流が行われているので、この辺りまでアユが上れば、有効に使えるのではないかと

と思う。調査に当たっては、地元の人にアブラビレを切って放流して貰うなど、協力してもらった。

アユを取り巻く環境として、カワウとか冷水病、外来種のコクチバスなど他にも多くの問題が存在する。

### 解禁前に堰などで違法に釣られている稚アユ

荒川では、堰などの遡上障害物があり、稚アユが上流に上れない。荒川本流についても、上れる区間は限られていて、入間川についても菅間の堰で止まってしまう、そこから上流の入間川・高麗川・越辺川などの支流に上ることはできない。

漁協が平成12年から秋が瀬の堰の下で定置網を掛けて稚アユを取り始めた。秋が瀬の堰は、河口から30km位のところに位置していて、3月10日前後、遅いときでも3月17日頃一番のアユの遡上がみられている。漁獲のピークは4月中旬から5月の初旬である。

荒川の漁協の人は、それまで稚アユを捕ったことがなかったので、指導を行った。秋が瀬の堰の下流は干満差が2m位あるので、干満の差のある場所で有効な建網漁法という漁法を採用した。兩岸に大型の漁具を設置して稚アユを捕っている。

秋が瀬の堰の下流では、4月から大勢の人がアユを釣っている。埼玉県漁業調整規則では、漁期は6月1日から



秋が瀬の堰の下に仕掛けられ稚アユを捕る建網

12月31日で、禁漁期間は1月1日から5月31日までになっているが、実際には3月から稚アユがかなり釣られているのが実態だ。

稚アユが着く場所というのがある。障害物があるような所で、荒川だと秋ヶ瀬の堰、市野川との合流点、武蔵水路との合流点、明戸のサイフォン、入間川の菅間堰、元荒川の末田須賀堰、利根川の利根大堰など。こうした所で違法に稚アユが捕られている。

それに対して、看板が建てられているだけで、行政による取り締まりは、ほとんど行われていない状態で、経済的もかなりの損失といえる。

現実が漁業調整規則にあっていないので、改正した方がいいのではないかと考えている。釣りの仕掛けも進化したので、例えば禁漁期を1月1日から3月31日までとし、4月1日から場所・河川を指定して、稚アユ釣りを解禁し、放流している友釣り漁場では、従来どおりの6月1日以降の解禁とすべきではないかと思う。(以下次号)



## 水量が多く、ミズガキであふれていた大正時代の入間川・新河岸川

大正時代の写真は、かわごえ環境ネットからお借りして掲載

### かわごえ環境フォーラムでの基調講義の写真から

2月24日に川越で行われたフォーラムで、川越市文化財審議会会長の小泉功氏が「昔の川越は水が豊かだった」というテーマで講演をされた。その時に公開された大正時代の川越周辺の様子を写した極めて貴重な写真である。現在と比較すると改めてその水量の多さに驚かされる。



▲東上線の入間川に架かる鉄橋下で川遊びをする子どもたち。夏には鉄橋のそばに川遊びの人たちのための臨時の停車場が設置されたそう。(大正15年)下は現在の同地、写真では分らないが、現在は水深が浅い。



▲水量が多かった赤間川(新河岸川上流)の高沢橋付近。川で泳ぐ3人の子どもが写っている。近くには大きな水車小屋もあったそう。(大正時代)下は現在の赤間川の風景。あの水はどこへ消えてしまったのだろうか。

# ▶ 流域活動団体 ◀ EVENT INFORMATION

● ちょっと出かけてみませんか



イベントについてのお問い合わせは  
荒川流域ネットワーク事務所  
● FAX 04-2936-4120  
● 携帯 090-7804-5722 (鈴木勝行)  
までお願いします。

📅 イベント   🌿 自然観察会   🛡️ 保全活動   🧹 清掃活動   🗣️ シンポジウム   📖 学習会

## 📅 浦山ダム周辺の野鳥観察会 秩父市

内容 ● 浦山ダムを歩きながらダムに来る水鳥たちやホウジロなどの野鳥を観察します。  
日時 ● 2007年**5月13日**(日) 9:00～12:00  
集合場所 ● 浦山ダムサイト「うららピア」前  
参加費 ● 無料  
主催 ● NPO法人秩父の環境を考える会  
問合せ ● 0494-54-1490 (黒澤)

## 🗣️ 荒川自然再生シンポジウム 秩父市

内容 ● 午前中はAコース六堰・玉淀ダム、Bコース浦山ダム清水バイパス、Cコース旧吉田町元気村バイオマス発電の見学を行い、午後は魚類・魚道専門家の君塚芳輝氏の講演とシンポジウムを開催。詳細は下記へ  
日時 ● 2007年**5月27日**(日) 9:00～16:00  
会場 ● 秩父宮記念市民会館  
主催 ● NPO法人秩父の環境を考える会  
問合せ ● 0494-54-1490 (黒澤)

## 📅 NPO現代座公演「約束の水」 鴻巣市

内容 ● 日系ブラジル人のミツコが、亡くなった祖母から聞いた故郷の村にある「約束の水」という湧き水を訪ねた。彼女がそこで見たものは。  
日時 ● 2007年**6月6日**(水) 18:30開場(上演時間110分)  
会場 ● クレアこうのす(鴻巣市文化センター大ホール)  
チケット ● 前売り大人2500円小・中・高生1500円(当日売り500円増)  
主催 ● 鴻巣「約束の水」上演実行委員会  
問合せ ● 048-596-7787 (川島)

## 🌿 里山体験プログラム/田んぼづくり教室 寄居町

むさしの里山研究会では4月から12月までに合計20回の体験プログラムを開催します。今回は5月下旬～7月上旬のプログラムをご紹介します。  
①**5月26日**:『トンボの羽化を見てみよう』  
嵐山町の槻川でサナエトンボの羽化観察や、ヤゴ探しを行い、お昼は焼きそばを食べます。参加費は大人1200円、子ども1000円、幼児無料です。  
②**6月10日**:『田植えにチャレンジしよう』  
寄居町の田んぼで田植えを行います。昼は黒米入りのご飯とけんちん汁で、ちょっぴり黒米の玄米をプレゼントします。参加費は大人1500円、子ども800円、幼児無料です。  
③**7月7日**:『真っ黒な夜はホタルの光が頼りだ』  
夕食用のうどん打ちを行い、天ぷらうどんを腹ごしらえしたあと、寄居のホタル生息地でホタルを探しに行きます。参加費は大人1800円、子ども1200円、幼児無料です。全て申し込み制です。  
その他、むさしの里山研究会では、田植えや稲刈りへの作業体験とおして、水田という環境の大切さを実感して頂くとともに、耕作放棄されそうな水田を守るために「田んぼづくり教室」も開催しています。参加費は1人(1家族)5千円です。参加を申し込みの方は、里山体験プログラムの田植えと稲刈りに無料で参加できます。また、多くの分配はできませんが、できたお米は参加者で均等に分配します。  
詳細は当会HPをご覧ください(048-581-4540)またはメールにてお問い合わせ下さい(tombo2@d1dion.ne.jp)。

## 🌿 自然観察会と保全活動 川越市

内容 ● 川越市仙波河岸史跡公園での野鳥を中心とした自然観察と植物の名札付け・外来種の除去作業  
日時 ● 2007年**6月2日**(土) 9:00～12:00  
集合場所 ● 現地(駐車場は衛生環境センター)  
参加費 ● 100円(保険代)  
持物 ● 飲み物、筆記用具、雨具、帽子等  
主催 ● かわごえ環境ネット自然部会  
問合せ ● 049-224-8811 (川越市環境部環境政策課・松本)

## 🛡️ 三つ又沼ビオトープでの保全活動 上尾市

内容 ● 「クサフジとピンクのノイバラを見る会」と「ツル植物退治と竹林の管理」。竹林管理はたけのこ取りです。鎌とたけのこの入れ物をご用意ください。  
日時 ● 2007年**5月27日**(日) 9:00～12:00  
集合場所 ● 三つ又沼駐車場  
参加費 ● 100円(保険代)  
主催 ● NPO法人上尾・荒川の自然を守る会  
問合せ ● 048-726-1078 (菅間)

## 🌿 「(仮称)川越市森林公園」計画地自然観察会 川越市

内容 ● 川越で一番まとまった森が美しい季節を迎えました。林床に咲く花々も今が一番多い時期です。  
日時 ● 2007年**5月12日**(土) 9:30～12:30  
集合場所 ● 現地  
参加費 ● 100円(保険代)  
持物 ● 飲み物、筆記用具、雨具、帽子等  
主催 ● かわごえ環境ネット自然部会  
問合せ ● 049-224-8811 (川越市環境部環境政策課・松本)

## 🛡️ 三つ又沼ビオトープでの保全活動 上尾市

内容 ● 「早朝の管理作業とミドリシジミ・コガネグモの観察会」早朝の自然観察でいつもとは一味違う生き物にあえると思います。  
日時 ● 2007年**7月8日**(日) 6:00～9:00  
集合場所 ● 三つ又沼駐車場  
参加費 ● 100円(保険代)  
主催 ● NPO法人上尾・荒川の自然を守る会  
問合せ ● 048-726-1078 (菅間)

### 編集後記

堰の調査のため訪れた川越市の入間川で、浅間堰の下流にできたワンドに集まっている子どもたちを見つけた。タモ網や仕掛けで、ヤマベの稚魚やヨシノボリ、コオニヤンマのヤゴなどを捕まえていた。近所の川越の小学生と鶴ヶ島の小学生の2つの別のグループだということだった。魚の稚魚が育つワンドは、今も子どもたちを引きつけて止まない魅力があるのだろう。近所の子どもたちは、入間川は水が汚いので、泳ぐときは高麗川に行くと話していた。高麗川の近くの子は高麗川では泳がないという話しを聞いたことがある。昔のように身近な川で子どもたちが安心して川遊びができる環境を作りたいものである。(鈴木)